富山・新潟県境域におけるアクセントの地域差と世代差

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/7129

富山・新潟県境域における
アクセントの地域差と世代差

加藤和夫・林　智子

キーワード：アクセント変化、東西アクセント、地域差・世代差、富山・新潟県境域

1．はじめに

一般に日本の方言区画で言うところの東部方言と西部方言との接境域については、明治30年代の国語調査委員会の調査報告以来、これまでにも多くの研究がある。それらのうち、アクセントに関しては、大まかに言えば太平洋側が愛知県と三重県の県境、日本海側が富山県と新潟県の県境付近に東西両アクセントの境界線が引かれるとされていた。

小稿では、加藤の指導のもと、林が卒業論文および修士論文のための調査で得た資料によって、上記アクセント境界線のうち、富山・新潟県境付近におけるアクセントの動向について報告する。

2．従来の調査と今回の目的

当該地域の東西両アクセントの分布については、平山輝男（1955）以来、柴田武・徳川宗賢・グロータース・馬瀬良雄氏による糸魚川地方の言語地理学的調査（1957,1959,1961）、さらには渡辺富美雄（1969）（1975）、川本栄一郎（1980）などの調査・報告がある。

まず、平山氏によって東西両アクセントの境界線が青海町青海と同町寺地の間に走ることが明らかにされ、柴田氏等による糸魚川調査でもほぼ同じ結論が得られている。

一方、渡辺（1975）では、本来富山アクセント（西側のアクセント）の集落とされていた青海町青海の世代別調査によって、老年層に見られる富山アクセントが若年層で共通語アクセントと一致するアクセントに変化（共通語化とも言える変化）していることを報告。さらに、川本（1980）では、1979年に実施した富山・新潟県境域でのグロットグラム調査によって、地域差と世代差の両面から、青海町以西（特に青海、歌、外波、上路の集落）で富山アクセントから共通語アクセントと一致するアクセントへの変化が40歳代以下で顕著であることを報告している。

今回の筆者達の調査では、川本氏の調査から10年余りを経た現在、当該地

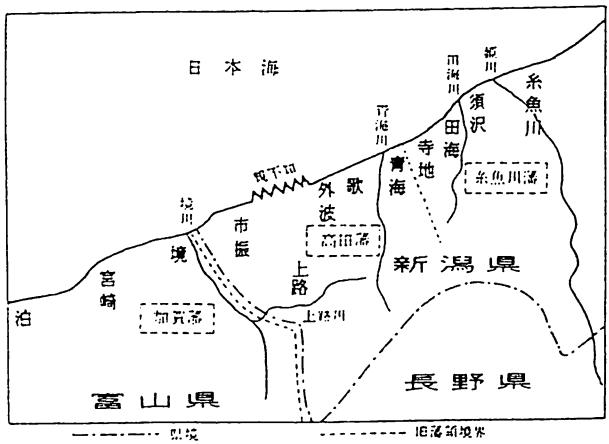
域でどのようなアクセント変化が進行しているか、また、その変化の要因を明らかにしたいと考えた。

3．調査地域および調査の概要

3.1 調査地域の地理的環境など

今回の調査地域である富山・新潟県境域とは、富山県下新川郡朝日町から新潟県西頚城郡青海町にかけての、海岸線に沿った東西約25kmの地域をさしている。(調査地域図参照)

調査地域図



この地域の地理的特徴として目を引くのは、山が海に迫った極めて厳しい自然環境下にあることである。特に、古来より北陸地方最大の交通の難所と言われてきた親不知・子不知海岸が途中にあり、この地域の生活・文化に大きな影響を与えてきた。すなわち、親不知・子不知海岸が存在したことで、それを挟んだ東西両地域は文化・交通など諸部面において交流がスムーズには行なわれなかった。

このような地理的環境のほかにも、江戸時代以前、富山県側の朝日町境と新潟県側の青海町市振には関所や駅が置かれ、境・市振の両関所が大変厳しい関所だったことが、東西文化の交流を滞らせてきたと思われる。そして、江戸時代には、富山県側朝日町は加賀藩、新潟県側の青海町市振・上路・外波・歌・青海は高田藩、同町寺地・田海は糸魚川藩というように分かれており、中でも同じ青海町で青海と寺地の間にあった藩の境が、平山氏によって明らかにされた東西両アクセントの境界線と一致していることに注意したい。

ところで、そうした交通の難所であった当該地域も、明治時代以降の国道8号線や北陸本線の開通により交通網が確保され、その後もルート変更や除雪設

備の発達で次第に交通網は整備され、状況は大きく変化した。そして、さらに1987年の北陸自動車道の開通により、当該地域の地域間交流はますます容易になったのである。

3.2 調査の概要

調査は1992年8月～9月に臨地調査法（調査者が直接調査地に赴いて話者に面接して行なう調査方法）によって実施した。さらに、補充・確認調査として1994年4月に新潟県糸魚川市、長岡市において、同年11・12月に富山県下新川郡朝日町境において同様の調査を行なった。

先の調査地域図に示したように、富山県下新川郡朝日町泊，宮崎，境，そして県境を越えた新潟県西頸城郡青海町市振、上路、外波、歌、青海、寺地、田海の10地点。補充調査地点は糸魚川市上刈、長岡市川崎、北山、下山である。

調査は、10歳代、30歳代、50歳代、70歳代の4世代の男性話者を対象とし、1地点につき各世代3名ずつの12名を原則とした。ただ、地点により女性話者が一部加わったり、過疎化などのために各世代3名という原則を守れない場合もあった。また、補充調査は1地点につき各世代1名ずつとした。以上の結果、最終的には男性86名、女性16名の計102名の資料を得た。

調査語については、1拍語の名詞、2拍語の名詞・動詞、3拍語の名詞・動詞・形容詞の中から、名詞94語、動詞35語、形容詞9語の計138語を選んだ。なお、補充調査の調査語は、1拍語12語、2拍語76語、3拍語67語の計155語で、すべて名詞とした。

臨地調査にあたっては、調査語および調査語を含む短文を大きな字で書いたものを用意し、それを各話者に通して2回ずつ読んでもらった。つまり、今回の調査結果は、いわゆる「読み上げ式調査」によって得られた結果である。調査者はその場でアクセントを調査票に記録すると同時に、後の確認のためにそれらの全てを録音するという方法をとった。臨地調査は林が担当し、調査終了後はまず林が録音によって調査票の記録を確認・訂正し、後に加藤が録音によって再度確認・訂正をした。

調査結果は後に示すようなグロットグラムの形で整理した。グロットグラムとは縦軸に年齢、横軸に地点をとって整理した表のことである。この手法を用いることによって、地域差・年齢差の両面から当該地域のアクセントの動態が立体的に描き出されることになる。

なお、結果の整理にあたっては、話者が2回読んだ同じ調査語のアクセントのうち、1回目と2回目のアクセントが異なっていた場合には、その地点において劣勢と判断されるアクセント型を括弧に入れてグロットグラム中に併記した。また、ある地点のある世代で原則とした3名の話者が得られなかった場合

は、一つの枠にアクセント型を示す記号が一つか二つしか入っておらず、地点により話者が得られなかった世代の枠にはアステリスク（＊）記号を入れてある。

4．当該地域のアクセント体系

2拍名詞を例とした場合、調査地域のアクセント体系は、富山県側の富山アクセントと新潟県側の糸魚川アクセント（従来の境界線は前述のとおり青海町青海と同町寺地の間とされる）で次の表のようである。

富山アクセントと糸魚川アクセントの体系（2拍名詞）

<table>
<tr><th></th><th>第Ⅰ類</th><th>第Ⅱ類</th><th>第Ⅲ類</th><th>第Ⅳ類</th><th>第Ⅴ類</th></tr>
<tr><td rowspan="2">富山県</td><td rowspan="2">○●▲</td><td colspan="2">○○$_W$ ：○●△</td><td rowspan="2">○●▲</td><td>○○$_W$ ：○●△</td></tr>
<tr><td colspan="2">○○$_N$ ：●○△</td><td>○○$_N$ ：●○△</td></tr>
<tr><td>新潟県</td><td>○●▲</td><td colspan="2">○●△</td><td colspan="2">●○△</td></tr>
</table>

表1で富山県側の第Ⅰ類で○●▲とあるのは、アクセント記述の慣例に従い、1拍目は低く発音され2拍目から助詞（三角形▲、△で示す）にかけて高く発音されることを表わしている。また、富山県側の第Ⅱ・Ⅲ・Ⅴ類でアクセント型の左側に○○$_W$や○○$_N$とあるのは、前者が2拍目の末尾母音が広母音（a・e・o）、後者が狭母音（i・u）であることを表わしている。

2拍名詞に関しては、寺地以東の糸魚川アクセントは共通語アクセントの体系と一致する。

なお、3拍語のアクセントでは、新潟県側の糸魚川アクセント（長岡市を中心とする新潟県中越地方のアクセントも同様）でも「兎（●○○）」「苺（●○○）」「卵（●○○）」などの頭高型や、「頭（○●○）」の中高型といった、共通語アクセントとは異なる型が散見される。

5．当該地域におけるアクセントの動向

5.1 川本調査（1979年）以後のアクセント変化

今回の調査は、最近の川本氏の調査からも既に13年が経過している。ここではまず、川本氏の調査結果との比較によって、限られた語についてではあるが、当該地域のアクセントがここ10年余りでどのように変化したかを明らかにする。

川本氏の調査結果（以後、「1979年調査」とする）と今回の調査結果（以後、本調査を「1992年調査」、補充調査を「1994年調査」とする）の比較は、川本栄一郎（1980）「富山・新潟県境地帯における方言の地域差と年齢差」に載る5語についてのみ可能である。以下、その5語（「雪」「鍵」「靴」「空」「行く」）について、13年間の変化を見ていくことにする。

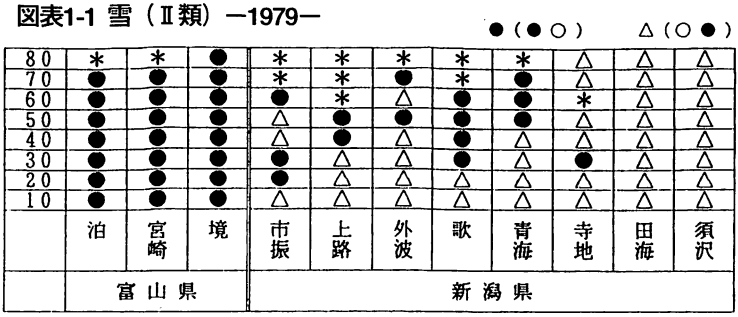
調査結果は以下全てグロットグラムの形で示す。グロットグラム中、縦軸は年齢（世代）、横軸は地点を表わす。川本氏の1979年調査では、1992年調査と異なり10歳代から80歳代まで10歳代ごとに調査（各地点各世代ごとに話者1名）していることと、調査地点で青海町田海の東隣須沢が加わっている。また、今回の1992年調査のグロットグラムには補充調査（1994年調査）の糸魚川、長岡の結果も併せて掲げた。

5.1.1 「雪」（Ⅱ類）

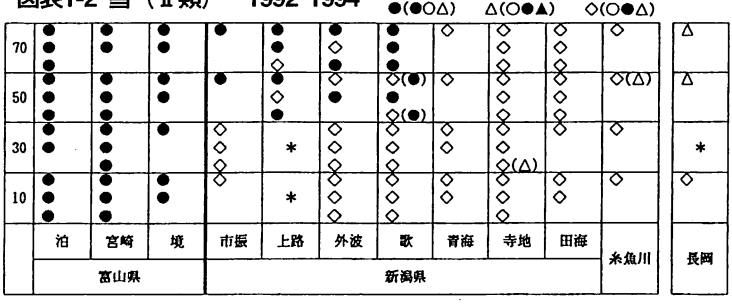
図表1-1と1-2を比較すると、50歳代以上では、1979年調査で寺地の西にあった糸魚川アクセントと富山アクセントの境界線が、1992年調査では一つ西の地点である青海の西までずれてきていることがわかる。ただ、これは図表1-1で助詞付きのアクセントが報告されていないので、あくまでも図表1-1に△で示した○●のアクセントが図表1-2の◇、つまり尾高型の○●△と同じものを表わしていると解釈してのことである。また、県境の市振などでも1979年調査に比べると、さらに上の世代（30歳代）にまで糸魚川アクセントの分布の広がりが確認できる。それに対し富山県側では、十数年を隔ててもなお全世代を通じて、Ⅱ類でかつ2拍目の母音が狭母音iの場合に現われる富山アクセントの頭高型（●○△）の安定した分布がみえる。

これらの事実は、渡辺氏や川本氏によって既に指摘されている、新潟県側での糸魚川アクセント（共通語アクセントとの一致を大きな威光とした）の西に向かっての勢力拡大が、現在もなお進行中である実態が浮び上がってくる。こうした現象は、言葉を含めた西の文化が東に向かって影響を与え続けていたと思われる当該地域のかつての状況に逆行するものであり、交通事情の変遷等、言葉を取り巻く様々な社会情勢の変化によるものであろう。

図表1-1 雪（Ⅱ類）—1979—



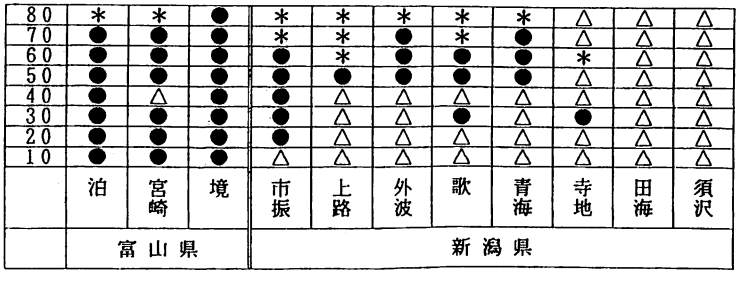
図表1-2 雪（Ⅱ類）—1992·1994—



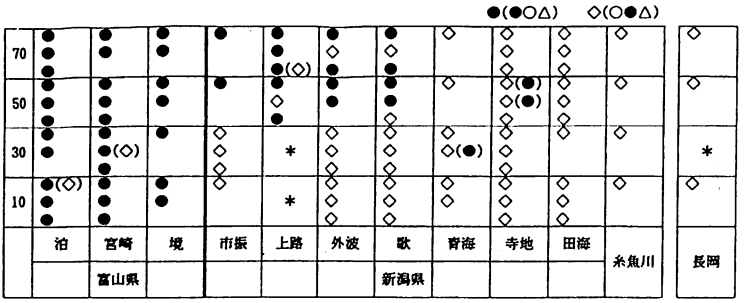
5.1.2 「鍵」（Ⅲ類）

「雪」の場合と同様、この語でも50歳代以上では、1979年調査で寺地の西にあったアクセントの境界線が、1992年調査では青海の西までずれてきている。また、これも「雪」の場合と同様、県境の市振では、1979年調査の時よりもさらに糸魚川アクセント（○●△）が分布を広げ、30歳代にまで用いられるようになっている。これに対し富山県側は、全世代を通じて、Ⅲ類で2拍目狭母音という条件による富山アクセントの●○△が両調査を通じて安定した分布をみせる。

図表2-1 鍵（Ⅲ類）—1979—



図表2-2 鍵（Ⅲ類）—1992·1994—

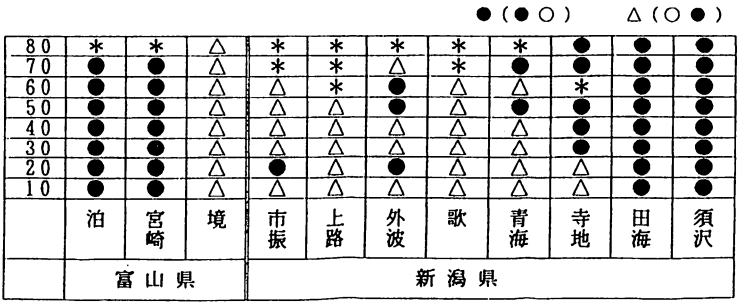


5.1.3 「靴」（Ⅲ類）

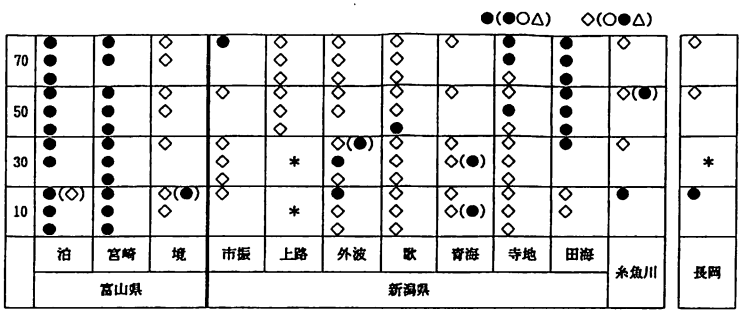
図表3-1の結果からは、かつてこの地域全域に富山アクセントの頭高型（●○△）が分布していたのではないかと予想される。それが、1979年調査で既に境から寺地の10歳代に共通語アクセントと一致する尾高型（○●△）が広く見られ、さらに1992年調査では、寺地の70歳代、田海の10歳代にまでその尾高型の広がりを確認することができる。

川本氏は1979年調査の結果について、境～青海間では「肘・雪・夏」（Ⅱ類）や「足・鍵・栗・炭」（Ⅲ類）といった語のアクセントが、従来の富山アクセントの頭高型（●○△）から共通語アクセントと同じ糸魚川アクセントの尾高型（○●△）に変化したことに影響されて、「靴」も尾高型に変化したと考えている。今回の1992年調査の尾高型の広がりも、そうしたⅡ・Ⅲ類の他の語の変化への類推の可能性が高いが、一方、若い世代の変化については、テレビ等の影響による共通語アクセント化の可能性も考えられる。

図表3-1 靴（Ⅲ類）—1979—



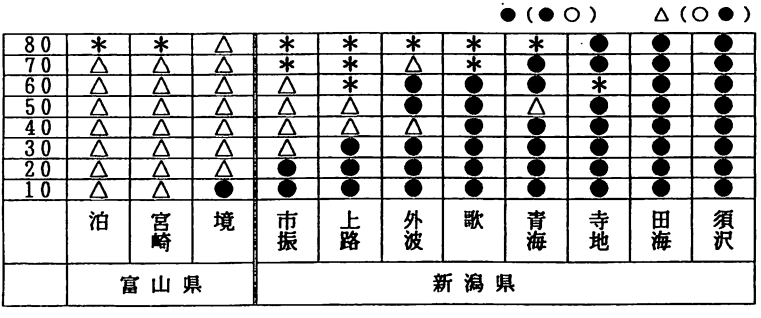
図表3-2 靴（Ⅲ類）—1992·1994—



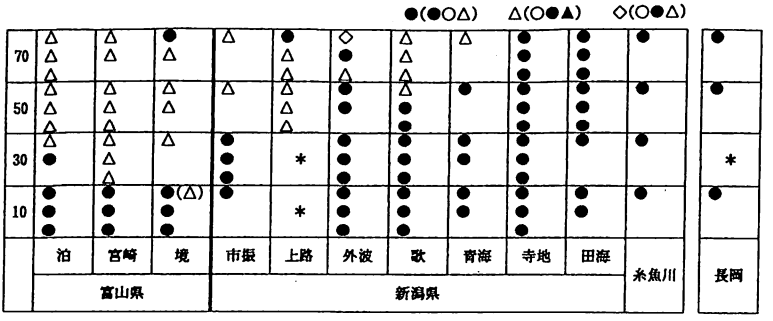
5.1.4 「空」（Ⅳ類）

1979年調査では、青海の70歳代から県境を越えた境の10歳代まで、共通語アクセントと同じ糸魚川アクセントの頭高型（●○△）の西進を示す斜めの線が引かれる。今回の1992年調査では糸魚川アクセントの西への進出は境を越えて宮崎・泊の10歳代にまで及んでいる。新潟県側の外波、市振でも、1979年調査の結果を受け継ぐ形で、頭高のアクセントがそれぞれ70歳代、30歳代まで広がっている。

図表4-1 空（Ⅳ類）—1979—



図表4-2 空（Ⅳ類）—1992·1994—

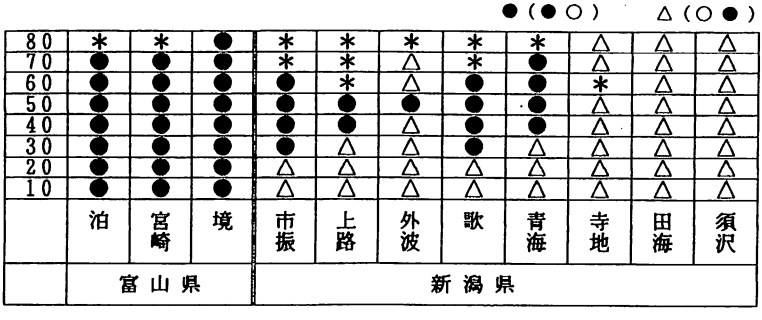


5.1.5 「行く」（Ⅰ類）

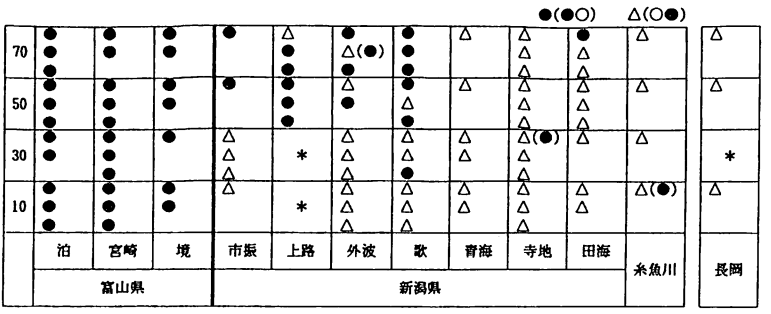
1979年調査では青海の40歳代以上にまでみられた富山アクセントは、1992年調査では青海の全世代が糸魚川アクセント化したために一つ西の歌までにしかみられなくなり、十年余りの間にアクセント境界線が西へ移動したことが確認できる。

また、1979年調査の結果を受け継ぐ形で、歌～市振間では糸魚川アクセント（○●）の使用世代が高くなっている。

図表5-1 行く（Ⅰ類）—1979—



図表5-2 行く（Ⅰ類）—1992·1994—



以上、川本（1980）に載る5語のアクセントについて、当該地域の13年間のアクセント変化の状況について概観してきた。そして、そこでは新潟県側を主な舞台として、従来寺地と青海の間に引かれるとされた東西アクセント（糸魚川アクセントと富山アクセント）の境界線が確実に西に向かって移動しつつあること、また若い世代を中心に富山アクセントから共通語アクセントと一致する糸魚川アクセントへの変化が進行中であることが確認された。

5.2 世代との関係からみたアクセント変化

では次に、今回の調査結果から、当該地域におけるアクセント変化と世代との関係について考える。その際、各世代ごとに、いわゆる東西アクセントの境界線（糸魚川アクセントと富山アクセントの境界）がどの地点の西側に引かれるかということに注目、整理してみた。

まず、既に触れた「雪」の1992年調査の結果（図表1-2）を例として、その様子を見ることにしよう。

図表1-2を見ると、10歳代・30歳代では市振の西、つまり県境に両アクセントの境界線が引かれる。同様に、50歳代では歌の西に、70歳代では青海の西に境界線が引かれることになろう。

以下、このようにして、今回の調査項目中糸魚川アクセントと富山アクセントの境界線が従来の寺地－青海間よりも西に移動している項目（全調査語138語のうち85語にその現象がみられた）について、各世代ごとにどの地点の西側に両アクセントの境界線が移動しているか報告する。なお、各世代ごとの結果のうち枠で囲んだ地点は、その世代で最も両アクセントの境界線が集中する地点であり、下線を引いた地点はそれに次いで境界線が比較的多く集まる地点である。

5.2.1 70歳代

糸魚川アクセントと富山アクセントの境界線の西への移動が確認された85語のうち、この世代に境界線が引かれると判断したものは35語である。どの地点の西に何語（括弧内の数字）の境界線が引かれるかを示すと次の通りである。

青海(23語)　歌（2語）　外波（4語）　市振（4語）　泊（2語）

この結果から、70歳代では従来の寺地－青海間に引かれていた境界線が一つ西の青海－歌間に集中して移動していることがわかる。

5.2.2 50歳代

この世代に境界線が引かれると判断したものは85語中74語である。以下どの地点の西に何語の境界線が引かれるかを示す。

寺地（1語）　青海(35語)　歌（13語）　外波（16語）　上路（1語）
市振（6語）　泊（2語）

結果を見ると、50歳代でも70歳代と同様境界線の多くが青海－歌間に移動している。一方、歌－外波間や外波－上路間にもかなりの語（計29語）の境界線が引かれ、70歳代よりもさらに糸魚川アクセントが西側に勢力を拡大している様子がみてとれる。

5.2.3 30歳代

この世代に境界線が引かれると判断したものは85語中83語である。以下これまで同様に、どの地点の西側に何語の境界線が引かれるかを示す。

青海（1語）　歌（1語）　外波（7語）　市振(66語)　宮崎（1語）
泊（5語）

結果からは、30歳代においては多くの語の境界線が市振－境間、つまり県境に移動してきていることがわかる。70歳代・50歳代に比べ一段と糸魚川アクセントの西への勢力拡大が進んだ姿である。

5.2.4 10歳代

この世代に境界線が引かれると判断したものも30歳代と同様85語中83語である。どの地点の西側に何語の境界線が引かれるかは次の通りである。

外波（4語）　市振(50語)　境（1語）　宮崎（1語）　泊(27語)

結果からは、まず30歳代と同じようにかなりの語において境界線が市振ー境間に移動してきていることがわかる。と同時に、この世代で注目されることは、今回の調査地域の西端、富山県の泊まで糸魚川アクセントと同じアクセントが現われている語が27語にも及んでいる点である。この結果を単純に糸魚川アクセントの西進とみることはできないと思われるが（後述の「5.3 アクセント変化の要因」参照)、外見上はそのような解釈も可能なような結果となっている。

5.3 アクセント変化の要因

では最後に、これまで述べてきたこととも関連して、今回の調査結果からみた当該地域のアクセント変化の要因について考察する。

当該地域にみられるアクセント変化の要因として、筆者達は大きく三つのものを考えている。一つ目は「共通語アクセントと一致する糸魚川アクセント化」、二つ目は「共通語アクセントとは一致しない糸魚川アクセント化」、そして三つ目は「同じ語類の語や他の語類の語のアクセントの影響による類推変化」である。以下では、それぞれの要因別に少し詳しくみていくことにする。

5.3.1 共通語アクセントと一致する糸魚川アクセント化

糸魚川アクセントの中には、共通語アクセントと同じ型を示す語が多く含まれている。中でも2拍語のアクセント体系は共通語アクセントの体系とほぼ一致している。そのため、これまで見てきたような富山アクセントから糸魚川アクセントへの変化が、真の意味での糸魚川アクセント化なのか、テレビを中心とした音声マスメディア等の影響による共通語アクセント化なのかを判断することは極めて難しい。したがってここでは、共通語アクセントと一致する糸魚川アクセント化を、その両方の可能性を含んだものとして一括して扱うことにする。

ところで、先に掲げた三つの要因のうち、当該地域で最も顕著に見られるのが、この共通語アクセントと一致する糸魚川アクセント化である。しかし、2拍語をはじめとして両アクセントが一致する語は多数にのぼり、語により、世代により、糸魚川アクセントの西進と共通語アクセント化が複雑に絡み合っていると考えるべきであろう。

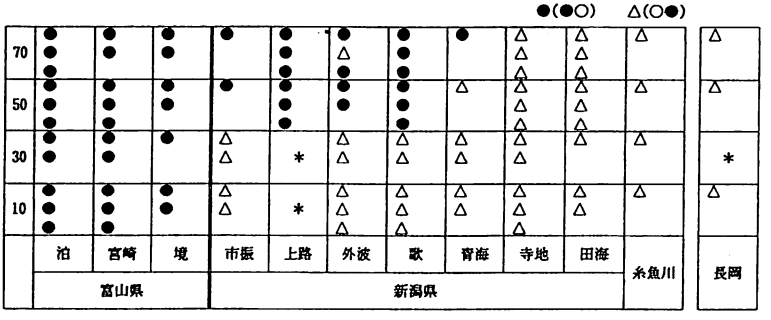
まず、共通語アクセントと一致する糸魚川アクセント（以下「共・糸アクセント」と略記する場合がある）が新潟県側にのみ分布するものから見ていくと、その典型的なパターンは、10歳代・30歳代といった若い世代で共・糸アクセントが市振にまで広がり、他の世代では従来の境界線である寺地ー青海間よりも

若干西に境界線が移動してきているものである。このような様相を示すものとして以下の語が挙げられる。

「橋」「紙」「髪」「錐」「肩」「煮る」「似る」「切る」「切った」「寝る」「練った」「振る」「降った」「鳴る」「成った」「咲く」「咲いた」「肘」「雪」「夏」「鍵」「炭」「栗」「足」「麦」「糸」「船」「針」「井戸」「行く」「死ぬ」「飛んだ」「聞く」「聞いた」「椿」「運ぶ」「植えた」「進む」「進んだ」「借りる」「遊ぶ」「遊んだ」「消える」「消えた」　以上44語

これらのうち、ここでは2拍語「寝る」と3拍語「遊ぶ」の調査結果を図表6、図表7に示す。

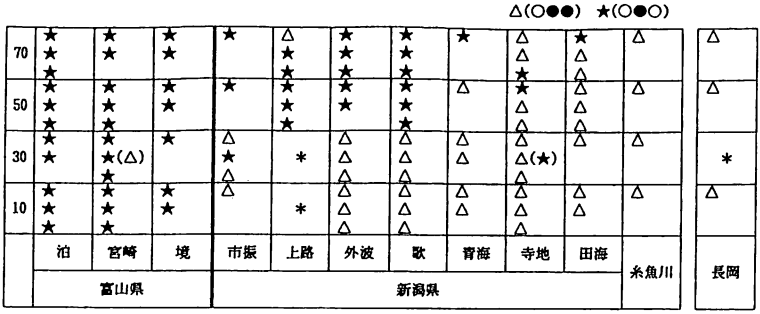
図表6　寝る（Ⅰ類）—1992·1994—



図表6は、歌から市振の30歳代、青海の50歳代まで共・糸アクセント化が進んでいるという、当該地域において富山アクセントから共・糸アクセントへ変化が進んでいる場合の典型的パターンを示しているが、若干の個人差にも注目しておきたい。

外波の70歳代に一人みえる平板型（○●）は、この話者が国鉄（現ＪＲ）の職員であったために他者と接触する機会が多かったためと思われ、話者自身も仕事柄方言よりも共通語で話す方がよいと常日頃思っていたと言う。一方、同じ外波の30歳代にみえる頭高型（●○）は、話者の勤務地が富山県黒部市であることが影響していると思われる。

図表7　遊ぶ（Ⅰ類）—1992·1994—



「寝る」と同様、この地域のアクセント変化の典型的な姿を示すのが図表7の「遊ぶ」である。しかし、「寝る」と比べて「遊ぶ」では若干アクセントのゆれがみられる。これは、3拍語のアクセントが2拍語のアクセントに比べ型の種類が多く、アクセントの型がゆれやすいことと、当該地域での富山アクセントと共・糸アクセントの対立が比較的近い平板型（○●●）と中高型（○●○）の対立であるためのゆれと思われる。

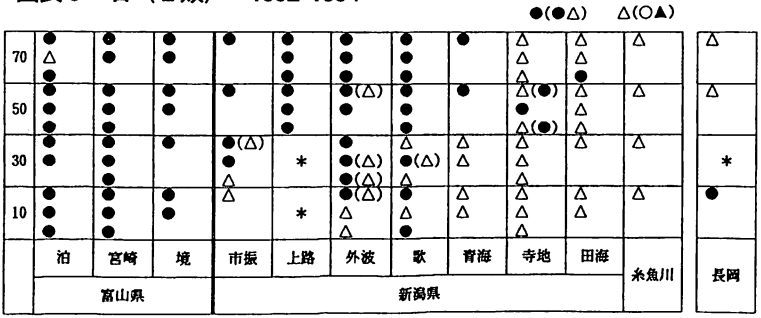
次に似たものとして、市振の10歳代まで共・糸アクセント化が進み、他の世代では従来の寺地－青海間より若干西に境界線が移動しているものがある。以下の語がその例である。「日」の調査結果を図表8に示す。

「葉」「日」「巻く」「巻いた」「植える」「借りる」　　以上6語

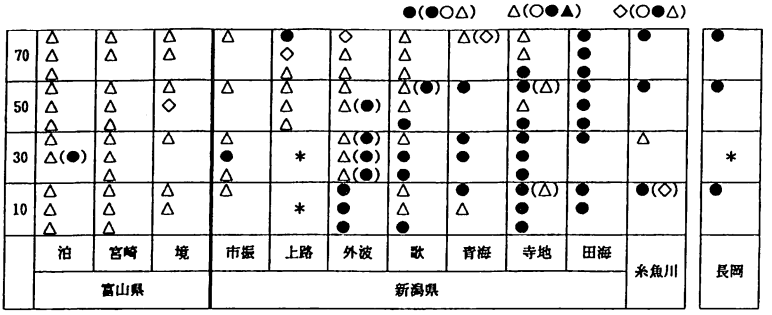
また、市振よりも東の外波の10歳代・30歳代まで共・糸アクセント化が進み、他の世代では従来の寺地－青海間より若干西に境界線が移動しているものがある。以下の語がその例である。「鎌」の調査結果を図表9に示す。

「鎌」「飛ぶ」「運ぶ」「違う」　　以上4語

図表8　日（Ⅱ類）—1992·1994—



図表9　鎌（Ⅳ類）—1992·1994—



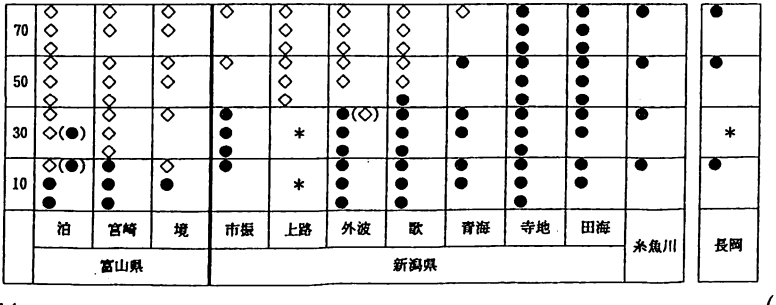
次に、若い世代での共・糸アクセント化が新潟県側にとどまらず富山県側にまで進み、特に10歳代・30歳代で共・糸アクセント化している例を見てみよう。そのうち、境まで共・糸アクセント化が見られるものは「鈴」、宮崎まで共・糸アクセント化が見られるものは「松」である。そして、泊の10歳代・30歳代まで共・糸アクセント化が見られるものに以下のような語がある。

「雨」「箸」「雲」「蜘蛛」「傘」「空」「窓」「汗」「鮒」「出た」「死んだ」「緑」「嵐」「命」「小麦」「狸」「朝日」「油」「病」「運んだ」「帰る」「帰った」「掛ける」「違った」「起きた」　以上25語

上記25語のうち、2拍名詞についてはⅣ類・Ⅴ類の語が多い。そのうちⅣ類の語については、1994年調査の結果から、語の音環境（末尾母音が広母音）が影響していると考えた。新田哲夫（1991）「富山市アクセントの動態－共通語化を中心に－」では、アクセント変化の遅速と音環境の関係（若年層〈1951年～1968年生〉以上の世代では、Ⅳ・Ⅴ類で末尾母音が広母音の場合は共通語アクセント化しにくい。逆にⅣ類で末尾母音が狭母音の場合は共通語アクセント化しやすい。）について言及している。当該地域でも富山市と同様の傾向が見られたことから、富山県側の10歳代の共・糸アクセント化については、いわゆる共通語アクセント化である蓋然性が高い。

上記の25語の中から「汗」の調査結果を次に示す。

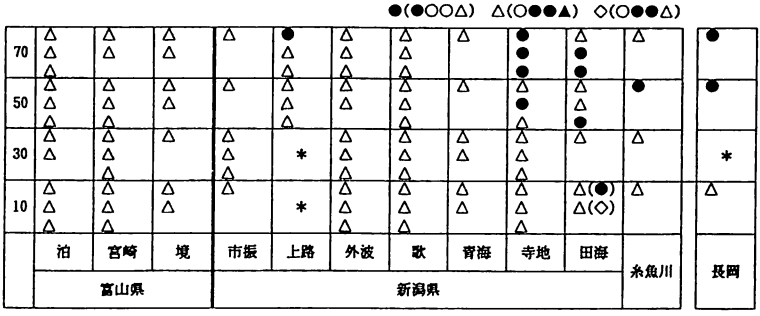
図表10　汗（Ⅴ類）—1992·1994—



富山県側３地点の10歳代における共・糸アクセント化が確認できる。また、青海の70歳代にはまだ富山アクセントの尾高型（○●△）が見えるが、柴田武(1988)『糸魚川言語地図　上巻』によれば、1960年前後の青海の老年層でもすでに頭高型が現われていたことがわかる。

また、わずかではあるが、新潟県側で糸魚川アクセントから共通語アクセントへの変化と見られる例があった。「鼠」「背中」の２語がそれである。ここでは「鼠」の調査結果を示す。

図表11　鼠（Ⅵ類）—1992･1994—



新潟県側の寺地、田海では本来頭高のアクセントが分布していたと考えられるが、現在これらの地点の50歳代あたりまで平板型の共通語アクセントと同じアクセントが広がっている。この語については富山アクセントも共通語アクセントと一致するが、この場合は富山アクセントの東への侵攻ではなく、いわゆる共通語アクセント化と考える方が妥当であろう。

5.3.2 共通語アクセントとは一致しない糸魚川アクセント化

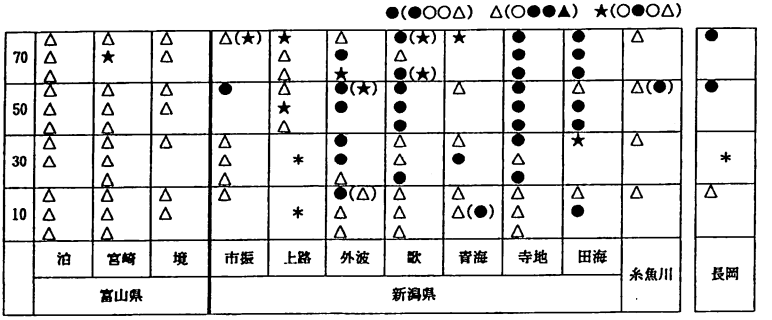
ここに含めたものは、共通語アクセントとは異なる糸魚川アクセントの型に変化しているものである。前述したように、糸魚川アクセントでは、３拍語のアクセントに共通語アクセントとは異なる型が見られる。

今回の調査結果からは、新潟県側において、従来富山アクセントが分布していたと思われる地点に、共通語アクセントとは異なる糸魚川アクセントが分布を広げたと考えられる語が、わずかではあるが確認された。「頭」と「兎」の２語がそれである。ここでは「兎」の調査結果を図表12で見てみる。

1994年調査で、長岡の50歳代以上や糸魚川の50歳代に頭高型（●○○△）が見られたことからも、「兎」の糸魚川アクセントは本来頭高型だったと考えられる。それに対し青海から市振の間では、以前は富山アクセントの平板型（○●●▲）が分布していたのではなかろうか。今回の結果で青海、歌、外波に見

える頭高型のアクセントは東の糸魚川アクセントの影響による変化と思われる。もっとも、新潟県側の地点（特に寺地以東）で10歳代を中心にみえる平板型の分布は、富山アクセントとは無関係のいわゆる共通語アクセント化であろうと思われる。

図表12　兎（Ⅵ類）—1992·1994—

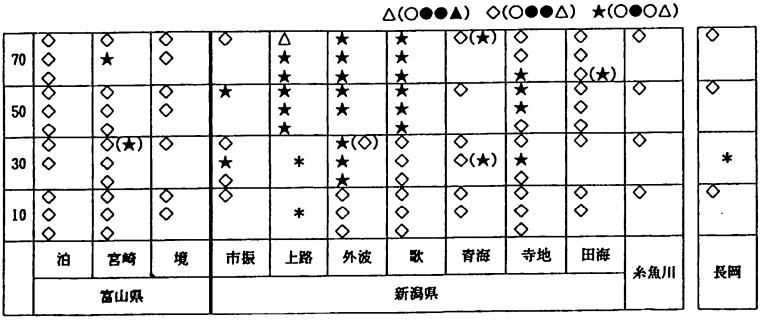


5.3.3 同じ語類の語や他の語類の語のアクセントの影響による類推変化

ここで言う「他の語類の語のアクセントの影響」とは、他の類の同音異義語のアクセントの影響や、所属語の多い他の類のアクセントの影響などをさす。今回の調査結果からは、それらにあたる例として、「泡」「欠いた」「靴」「男」「黄金」の5語が考えられる。

これらの5語はそれぞれに違った変化の仕方をしているが、ここでは「男」の調査結果を例として見ることにする。

図表13　男（Ⅳ類）—1992·1994—



図表13では、歌・上路の50歳代以上、外波の30歳代以上に中高型のまとまった分布が見える。これはおそらく、糸魚川アクセントの3拍語に中高型のアク

セントが比較的多く現われることから、それらに影響され、類推して本来の尾高型（○●●△）から変化したものと考えられる。

6．おわりに

以上、今回の富山・新潟県境域におけるアクセント調査の結果に基づいて、当該地域におけるアクセントの動態を地域差と世代差に注目しながら、いくつかの観点から考察してきた。

既に予定の紙数を超えているので重ねてのまとめは省略するが、これまでにも述べてきたように、当該地域のアクセント変化の背景には「外的要因」「内的要因」など様々な要因が複雑に絡み合っている。小稿では、地域差と世代差を中心にアクセント変化の大まかな傾向を明らかにしたに過ぎず、残された課題は未だ多い。今後も当該地域では、富山アクセントから糸魚川アクセント（特に共通語アクセントと一致する）への変化が、いわゆるテレビ世代を中心としたアクセントの共通語化と平行して、さらに進行していくものと思われる。そして、アクセント変化の様相はますます複雑な姿を呈することが予想される。従来から東西アクセントの接境域の代表的地域として注目されてきた当該地域においては、地域差や世代差はもちろん、さらに個人差・場面差・調査法による差などにも考慮しながら、アクセント変化の実態に迫るため、さらに詳しい調査研究を進める必要があると思われる。

【主要参考文献】

加藤　和夫・林　智子（1994）「富山・新潟県境域における東西アクセントの動向」（『日本方言研究会第58回研究発表会発表原稿集』）

川本栄一郎（1980）「富山・新潟県境地帯における方言の地域差と年齢差」（『佐藤茂教授退官記念　論集国語学』　桜楓社）

柴田　　武（1988）『糸魚川言語地図　上巻』　秋山書店

柴田　　武（近刊）『糸魚川言語地図　下巻』　秋山書店

徳川宗賢・真田信治・新田哲夫編（1991）『富山市におけるアクセントの動態（資料）』（文部省科研費重点研究「日本語音声」研究成果報告書）

新田　哲夫（1991）「富山市アクセントの動態－共通語化を中心に－」（『日本方言研究会第53回研究発表会発表原稿集』）

平山　輝男（1955）「新潟県南部のアクセント境界線について」（『音声学会会報88号』）

渡辺富美雄（1969）「新潟県西南部のアクセント境界線について」（『新潟大学教育学部紀要10－1』）
渡辺富美雄（1975）「東西両アクセントの境界線におけるアクセント変化の方向」（『島田勇雄先生退官記念　ことばの論集』　前田書店）

<付記>小稿は1994年6月の日本方言研究会第58回研究発表会（於：東京外国語大学）において口頭発表した際の発表原稿をもとに、その後の調査資料も加えて書き改めたものである。

（加藤和夫　金沢大学教育学部・林智子　平成7年大学院修了）